

内なる敵：ロシア兵の性的暴力被害者は親ロシア協力者

アリス・スペリ（The Intercept 記者）著、脇浜義明訳、田中一弘・大賀英二補訳

The Intercept, 2023年9月27日

*脚注はすべて訳注

ウクライナ戦争初期、ブチャ陥落の数日後、最初のロシア占領兵が入城し、ウクライナ兵が残っていないか捜索した。未亡人のアンナは年老いた母親と10代の娘の3人暮らしだった。「うちは女所帯で男はいません」とロシア語で言った。彼女は母親に一言もしゃべるなど言っていた。ロシア兵たちが母親のウクライナ西部訛りをきいて、ロシア人がウクライナのナショナリストやそのように考える人々を指してよく使う蔑称であるバンデリヴカ¹としてマークするのではないかと心配したのだ。

アンナはロシア人たちに父親の死亡診断書を見せたが、そこには父親がロシアの極東で生まれたことが記されていた。それをロシア兵に見せた。「そのおかげで助かった」と、彼女は私に語った。

彼女はロシア兵に愛想よくした。近所の老婦人から「ロシア人を拒否するとひどい目に合うよ」という忠告を受けていたからだ。

ロシア兵は男を警戒していたので、女3人だけの世帯なので大丈夫だろうと思った。近所の人の中には地下室に親類の男性を隠していたのがばれて、酷い目にあった人がいる。占領初期の頃、アンナは娘を連れてブチャの町へ出て、病院で人道支援物資を貰ったり、無人となった店から溶けたアイスクリームを漁ったりした。通りには男たちの切断された死体が転がっていた。

アンナの友好的態度はロシア兵——彼女や多くのウクライナ人が日常的にロシア軍を「オーク」（気味悪い架空の化け物のこと）と呼んでいる——に気に入られたようであった。家宅捜索した後に、兵隊たちはアンナたちに白い腕章を与えた。それは「調査済み」で脅威なしを表す印であった。

女だけというのは最初のロシア兵の捜索のときはいい結果であったが、二番目に来たロシア兵のときは危ない条件であることが分かった。グループの班長らしい20代前半の若い男がアンナを銃の台尻で殴って、オーラル・セックスを要求した。この若者が13歳の娘を強姦する気配を見せたので、アンナは娘を守るために男の要求に応じた。このことのために彼女はウクライナ社会で辛い目に会わされた、と彼女は私に語った。彼女は、戦時中の性的暴力の犠牲者と認められたにも拘らず、占領軍の協力者として迫害され、疑いの目で見ら

¹ 「banderivka」とはロシアと戦うためにナチスと協力したウクライナの戦時民族主義指導者ステパン・バンデラのことを指す言葉だ。ロシア当局はたびたび民族主義的見解を持ったウクライナ官僚を貶める時にこの用語を使うとメディアは伝えた。」
<https://japanese.joins.com/jarticle/289747?ref=mobile> より。原文では banderivka となっているが、確かなことは断言できないのだが、これはスペルミスだと思われる。—田中。

れたのだ。

この夏に私はブチャの彼女の家でアンナと娘にインタビューした。ブチャはロシア侵攻の恐怖を世界に語った町である。二人は親身になって耳を傾ける私に興奮して何時間も語った。これまで同じことを何回も話したが、どうやら聞き手の政府役人は真剣な聞き手ではなかったようである。(アンナとマリアも仮名である。彼女たちプライバシー保護のため本名を伏せている) 戦争が始まって2年経過、ウクライナ軍が NATO の大規模援助武器を使ってロシアに占領された領土を取り返そうとしている時にあたる中で、2人の話はウクライナ社会を引き裂いている亀裂を象徴するものであった。一方ではアンナの体験は戦時下の性暴力といういつまでも残る恥辱であるが、他方では、前々からウクライナ社会にあった根深い社会的亀裂、戦争によってより大きくなった亀裂を反映するものである。

ウクライナ軍の攻勢で解放された地域の生存者がロシア軍の残虐行為の新たな証拠を明らかにするにつれて、ウクライナ人は正義を求め、占領者に協力したと思われる人物、あまりロシア人を悪く言わない人物に対して、憎しみをつのらせた。その基調を打ち出したのはゼレンスキー大統領で、彼は昨年ロシア軍侵攻の数日後に、ロシアへの協力者に対する乱暴 (sweeping) で、かつ容赦ない報復をする法律を作ったのだ。

ブチャでも、隣人たちはアンナの選択を、戦時暴力で強制されたのに、それを非愛国的裏切り行為と決めつけ、彼女一家を避けるようになった。しかし、法執行当局にとっては、アンナの行為は厄介な問題であった。ウクライナ当局は戦争が原因で起こった犯罪を罰しないという方針を出していたからである。ウクライナとウクライナを支持する国際社会の検察官は、性的暴力を含むロシア兵の戦争犯罪を探し出し収集していた。それに乗って地元の当局は、目を光らせてロシアに協力したと見做される国民を探し出していた。

アンナは犠牲者であると同時に協力者であるという二重の扱いの板挟みで苦しんだが、この板挟みを地域社会も国家法執行機関も解決できなかった。

「人々は協力とは何かを正確に理解していないため、敵との接触はすべて協力だと考えている。」

「初め、誰もロシア人がそんなことをすると信じる者はいなかった。占領下で暮らす人々は必ずしも協力者ではなかったとしても、ロシア人に対してとても友好的だったと、多くの人々は思った」と、アンナの弁護士のカテリーナ・イリキエワ (Kateryna Ilikchiieva) が、アンナが語った性的暴行に関連して、そのように話した。「人々は協力とは何かを正確に理解しているわけではなく、ロシア人との接触がすべて協力だと思っているのです。」

こういう考え方はゼレンスキー大統領が成立させた法律によってさらに強化された。法律の文面はロシア人との関係を一切禁止すると具体的に規定しているわけではなく、「重大な結果」を招くかもしれない情報を国家の敵に与えることを禁じているだけである。しかし、実際には、どんな形にせよロシア人と接触することは疑惑の材料となった。「ウクライナ国民はロシア兵とのセックスも協力と見做している」と、ウクライナ人権グループ ZMINA の

法律（advocacy）担当マネージャーのアリーナ・ルノヴァ（Alena Lunova）は言った。

アンナの場合、様々な法執行機関が彼女に厳しい尋問を行い、彼女の性的暴行を受けたという陳述は何か月も取り上げられなかった。たぶん、性的暴行を受けたのは彼女一人だけではないだろう。ロシア兵から性的暴行を受けた被害者は多くいるはずだが、それを明らかにすれば「親ロシア協力者」という烙印を押され、当局から厳しい尋問にかけられるのを恐れて、黙っているのだ、と人権グループは推測している。その意味でアンナの件は反面教師となっているのだ。



2023年7月6日、ウクライナのブチャの自宅の裏庭を歩くアンナ。占領時代、ロシア兵が定期的に彼女の家を訪れ、性的虐待を受けた。Photo: Ira Lupu for The Intercept

「麒麟殿下」

2022年2月のロシア軍侵攻のずっと前から、アンナの女性だけの世帯は地域社会から好感を持たれてなかった。アンナは酒飲みで家で乱交パーティをやるという噂が何年間も流れていた。パンデミックの後、学校に行かなくなった娘のマリアのことまでささやかれた。アンナとマリアは74歳のアンナの母親と、雑草だらけの大きな庭に囲まれ荒れ果てた家で、市当局や一般社会とは疎遠な形で、自分たちに関する噂を気にせずに暮らしていた。青い髪の毛に派手な装身具をつけたアンナは、一見すると実年齢41歳より老けて見える→が、マリアは髪を明るい紅色に染め、芸術家みたいな化粧をしていたので、マリアの姉のようにも見えた。

ブチャの住民はロシア兵が来る前にあらかた町から逃亡したが、アンナ一家は逃げなか

った。ほぼ寝たきりの母親が家を離れたくないと言ったのだ。それに逃亡資金もなかったし、行くあてもなかった。彼女たちは家の中でロシア兵の侵攻状況をテレビで見ているが、やがて停電となり、空に煙が充満した。

最初に家へやってきたロシア兵は、マリアはロシア兵が自分と年齢が同じぐらいだと思った。彼女は愛想よくした方が安全だと思って、努力して友好的に振る舞った。

恐ろしいことが始まったのは二度目のロシア兵が来たときであった。指導者らしい若い男、異常に背が高いので仲間から「キリン殿下」(Pasha Giraffe)と呼ばれていた男が、いずれマリアが兵隊たちに手籠めにされるだろうから、俺が今やってもいいだろうとアンナに言った。ウクライナに来るまで3カ月もかかった、その間女つけなしだ、だから「慰みが必要だ」と言う兵隊もいた。アンナは、マリアはまだ子どもだから手を出さないでくれ、と兵隊たちに懇願した。あなたたちは善良な人間だと思う、と言った。彼女は、マリアに手を出さなければ自分があんたたちの相手をするに同意すると言った。「何もかも自分ひとりで背負う覚悟になっていました」と、アンナは私に語った。

その後、次々とロシア兵グループが一日に数回家へやってきた。空中に銃をぶっぱなして到着を告げ、荒れた庭の炉の周囲にたむろして、殺害行為の自慢話をした。時にはジョークを言ったり、アンナとマリアといっしょに歌おうと誘ったりすることもあれば、反対に恐ろしい振る舞いをすることもあった。キリン殿下は自分が仕切っていることを誇示するように、銃をすぐ撃てる状態にしながら喋った。何人かの兵隊はアンナと娘はウクライナ軍のスパイだと確信しているようだった。彼らはマリアの LOL 人形 — 世界中で人気のあるプラスチックの人形 — を、人形の目の中のレーザー光線が録音機だと言って、燃やした。兵隊は予想できない言動をし、かなり「ひねくれて」いた、と二人は私に語った。いつも酔っぱらっていて、たいていの兵隊はセックスを求めて家へ来た、と語った。

アンナは自分がやっていることを母親に知られたくなかった。それで彼女はセックス相手の兵隊を家の中へ入れなかった。外の庭にあるガレージの中に一人ずつ順番に入れた。「まるで並んで便所を待つみたいだった」と彼女は語った。一日に10人近く相手にし、2週間で30～50人になった、と彼女は説明した。

外で待っている兵隊たちは庭をぶらつき、マリアの腰を抱いたり、脚に触ったりしたが、それ以上のことはしなかった、とマリアが私に話した。彼女は母親を信頼し、母親の言ったとおりにした。「私はロシア兵たちを怒らせないように、機嫌を取りました。私たちは彼らに合わせる演技をしたのです。つまり、ゼレンスキーは間抜けで、プーチンは偉大だ、ロシア軍は解放軍だと言いました」とマリアは語った。

アンナは、うちへ来たロシア兵のほとんどは今では戦死しているでしょう。でも、出来ることなら「キリン殿下」は私の手で殺したかったと、言った。彼女は兵隊たちの呼称やあだ名を覚えていた。「軍曹」、「シャミール (Shamil)²」、「子犬ちゃん」、「君主」など。「君主」

² 19世紀における北カフカスのダゲスタン、チェチェンの山岳諸民族の解放闘争の指導者。-田中

は占領末期にアンナに泣いて謝罪した。何故自分たち兵隊はブチャに来て、こんなことをしたのか、自分では分からない、と言ったという。彼女がロシア兵のことを覚えていたことは、後に、戦争犯罪実行犯を特定する捜査で役に立った。



ウクライナのブチャを占領していたころ、ロシア兵がよく立ち寄った裏庭に座るマリア。Photo: Ira Lupu for The Intercept

ブチャ解放、住民の帰還

ブチャ解放後に建てられた記念碑によれば、ロシア占領の一月の間に少なくとも501人が殺害されたとある。もっとも、ウクライナ政府はもっと多いはずだと言っているが。占領軍が引き揚げたのは2022年4月初めで、戻ってきた住民は共同墓地に10体以上の死体が転がされているのを見た。アンナの居住地の近くにある小さな地所には半焼けになった死体が複数転がっていた。大通りにも死体があり、中には拷問をされたらしく、両手を後ろ手に縛られた死体もあった。

アンナの近所に住んでいた3兄弟の死体もあった。兄弟の一人が警官であったから殺害されたのだろうと思われた。また、ウクライナ語を教えていた女性一家の死体もあった。彼女がロシア語で話すのを拒否したために夫と息子といっしょに殺されたのだろうと、近所の人が語った。帰還した人の中には自分の家が略奪され焼かれたのを発見したが、まったく

<https://kotobank.jp/word/%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%9F%E3%83%BC%E3%83%AA-1173115>より。

無傷の家もあった。

アンナの近くの住人イラ (Ira) は、『インターセプト』誌の私のインタビューに、名字を伏せるという条件でインタビューに応じてくれた。ブチャ市内に入ることが許された4月4日、イラは愛猫を抱いて家の庭へ歩いていった。彼女の夫と親類の男性二人の処刑された死体が近くで発見された。

イラは帰ってきた初日にアンナとマリアを見たと話した。彼女は、二人が空き家から物を盗んでいたという噂を知っていた。誰かが塀の隙間から略奪風景を隠し撮りした不鮮明な写真やビデオがソーシャルメディアに流されていた。その中に、アンナが大きなピアノを手押し車で運んでいる写真と、略奪犯と特定された人物の傍に立っている写真があった。この略奪犯と特定された男は後にそれを恥じて自殺した、とイラは話した。もう一枚、アンナが笑っている写真があった。イラはこの笑いをひどく嫌悪した。それは彼女がブチャに戻ってアンナ親子に会ったときに撮った写真である。娘のマリアは嬉しそうに大きく笑い、アンナも控え目に笑っていた。二人はVサインをしていた。「生きて戻ってきたイラを見て、私たちは喜んだのです」とマリアは私に話した。

しかし、イラや住民にとって、占領下でアンナとマリアが元気に生きていたこと、彼女らの家が破壊されていないことは二人が祖国を裏切った証拠に映った。「死体が転がっている中で二人は笑ったのです。被害者が笑ったりしますか」とイラは私に言った。



ブチャの1カ月にわたる占領の間、ロシア軍兵士は少なくとも501人を殺害した。2022年4月4日、多くの人びとが通りや裏庭に散らばっているのが発見され、中には拷問の痕跡を残して両手を後ろで縛られている者もいた。Photo: Felipe Dana/AP

次々に住民がブチャ市に戻ってくるにつれ、アンナ一家に関する悪い噂がますます広まった。SNS ではアンナは「売春婦」と呼ばれた。アンナを殺すので住所を教えてくださいというポストもあった。アンナが略奪の「指揮を執っていた」と言う隣人たちもいた。彼らは略奪をロシア兵の蛮行と同じ種類の戦争犯罪だとした。彼らはアンナを警察に通報した。

隣人がアンナを非難したのは略奪に関してではなかった。占領の間も市に残り占領兵に殴られたことがある市職員は、アンナが占領軍の装甲車に乗って道案内をしていたと、彼女を非難した。アンナの家近くで見つかった年老いた住人二人の死体について、彼らがアンナの略奪行為を咎めて怒鳴っているところをロシア兵に撃たれたのだと、隣人たちは憶測した。占領軍が警官、元軍人、地域社会指導者などを殺害したが、どうやってそれを見つけたことができたのかを不思議に思った。「誰かが占領軍に教えたからです。たぶんアンナです」とイラが言った。

私がイラにインタビューしているのを通りかかった老婦人が立ち止まって聞いていたが、彼女は、ロシア兵がアンナに与えた白い腕章は「ロシア兵の味方になった」人物を表す印だと言った。スビトラーナ (Svitlana) とだけ名乗った隣人女性は、ブチャが解放されたときアンナは慌ててウクライナ国旗のイヤリングを付けたと、苦々し気に言った。「占領が終わったのでイメージを変えようとしたのですわ。」住民たちがアンナを責めたのに対し、アンナは、ロシア兵が戻ってくると言い返したと、スビトラーナが言った。「彼女の父親はロシア人でした。ロシアの血が流れているのです」と付け加えた。

そのうえにロシア兵とのセックスがあった。彼女は楽しんでそれをやったんだと、隣人たちは言った。彼女が兵隊たちと酒を飲み、踊り、ロシア人の武器の試し撃ちもやったという噂があると、隣人たちは私に話した。

アンナはピアノを取ったことを否定しなかった。通りに捨てられているのを発見し、ロシア兵が去ったあと、何人かの隣人に手伝ってもらって家へ運んだと私に説明した。ブチャを離れなかった住民の多くは、逃げた人々が戻ってこないと思って、品物や食物を取ったと、アンナは言った。隣人に関する情報をロシア兵に与えたことはないし、武器を試し撃ちしたことなんてないと言った。近所の人たちは、あなたがロシア軍装甲車に乗ったと言っていると私が告げると、アンナはバカバカしいと笑った。自分は娘を守るためにやむなくロシア兵と寝たことを隠さず隣人たちに明らかにしたことを語った。

イラはアンナの話信じなかった。イラは、ロシア兵に強姦された女性が何人かいるが、強姦後射殺された、と言った。一人生き残った女性がいるが、地下室に隠れているところを見つかって強姦されたが、口もきけない状態になっている、と話した。「それがひどい目にあった女の姿です。笑うなんてできないのです」とイラが言った。「アンナは演技がうまいか精神異常なんです。性的暴行ではありません。」



2023年7月6日、ウクライナのブチャで、ロシア兵に性的虐待を受けたガレージの隣にいるアンナ。

わが国の怪物（Our Orcs）

地域社会が噂する間に、ウクライナ当局は彼女の取り調べを始めた。

数週間にわたって法執行関係者が絶え間なく彼女の家へ来た。尋問が繰り返される中、彼女はことあるごとに兵隊による性的暴行を訴え、何なら自分を嘘発見器にかけて真偽を確かめてくれと言った。警官も役人も私のいうことを信じなかった、何しろ私は美人ではないし、着ている服も汚れていたからだ、と彼女は言った。「占領下で生き残った人は協力者になってしまうのです。占領の中で暮らしたことがない人には占領下の生活やこの家で起こったことは理解できないのです。」

一番先にアンナの家に来たのはウクライナ軍兵士で、家の中にロシア兵が武器を残していったか調べる。その後警官や役人が来たが、彼らは捜査目的を説明しなかったし、役人たちの所属省庁も言わなかった。アンナには誰が何しに来たのか分からなかった。娘のマリアが携帯電話で撮った写真には、ウクライナ国家警察の特殊部隊の戦略調査部の人間も混じっていることが分かった。

「占領下で生き残ったのであれば、お前はロシアの協力者だ」

地方検察局の検事も来ていた。検察局がアンナの性的暴行をどうして知ったのかは分からないが、検事のローマン・プシク（Roman Pshyk）はアンナの説明に真面目に耳を傾けたように見えた唯一の人間だった。プシクは、ブチャ市が解放後に機能を回復したとき、ア

ンナを婦人科病院へ連れて行って検査を受けさせた。病院には多くの年配の女性も検査を受けているのを見てアンナは驚き、マリアと母親を守ったことを改めてよかったと思った。

その後、役職を退いたプシクに『インターセプト』誌は取材した。彼は、ブチャの解放後、検察が調査したロシア軍の戦争犯罪は100件ほどあり、アンナの件はその一つだと言った。「性的ハラスメントの報告があれば検察が動きます。しかし、被害者の証言だけに依存しないで、証拠を探します」と彼は説明した。さらに、検察局はアンナに関する噂を聞いたわけではなく、アンナの証言だけで調査した、と付言した。その後検察局はこの件を国家警察とウクライナ防諜部局である SBU（ウクライナ保安庁）に照会した。しかし、アンナが彼らから連絡を受けたのは数カ月後のことだったという。

地域警察も家捜しをして、ガレージでペンキのスプレー缶を見つけ、ロシア兵が協力者の家に印をつけるのに使ったと解釈した。彼らは各部屋を隅々まで搜索し、引き出しの中を漁り、何か品物を見つけると、盗んだのでないなら領収書を見せろと言った。警官はアンナの家で見つけた品物の写真を撮って、近所の人々に見せて、盗まれたものかどうかと尋ねたと、スピトラーナが言った。『インターセプト』誌は警官に説明を求めたが拒否された。

乱暴な警官もいた。昨年6月、理由も言わずに家にあるすべての電話を全部よこせと命令した。マリアは怒ってその警官の写真を撮ろうとしたら、警官はマリアの携帯電話を取り上げ、彼女を捻じ伏せたて、手錠をかけた。この日の搜索の指揮をしていた戦略調査部の上級



捜査員のヴィタリー・ペレハティ（Vitaliy Pelehatiy）は『インターセプト』誌の質問に対して、警官たちは盗品を探していて、携帯電話はその捜査の一環として押収した、と答えた。

「あの人たちはオークみたいに振る舞った。わが国のオークです」とアンナが言った。

2023年7月6日、ロシア兵に対する戦争犯罪裁判でマリアとアンナの弁護を務めるボランティア弁護士、カテリーナ・イリッキエワがウクライナのブチャにある自宅を訪問した。Photo: Ira Lupu for The Intercept

緩慢な公式見解の変化

実際には性的暴行被害は報告されないことが多い。係争地域で性的暴行の被害者を敵の

協力者と非難することはますます事態を悪化させる。昨年ウクライナ軍が一部の占領地を解放したとき、欧米が戦争犯罪を収集し記録せよとの激励もあって、被害の報告が出始めたが、実数はつかめていない。まだ占領下にある大部分の地域では何も分からないし、解放された地域でも、恐怖と恥辱と世間の目と、政府の偏見や固定観念にも続く失敗のためにうまくいかない、人権派弁護士が嘆いている。

「わが国の社会は性暴力被害者を、被害者ではなくて、加害者であるかのように非難する」と、元検察総長の代理を務めたことがあり、ゼレンスキー政府が成立させた「侵略国との協力を犯罪とする」新法を批判した数少ない人物であるギュンドゥズ・マメドフ (Gyunduz Mamedov) が言った。性暴力被害者を敵に協力したと疑惑の対象に扱うことは、「二重の被害」だと彼は語った。

戦争開始から7カ月後の2022年9月、ウクライナ検事総長は戦争犯罪収集部の中に戦争関連の性的暴力 (CRSV) を調査し、起訴するための事務所を開設した³。これは、性的暴行の存在を公的に認めたことであり、ウクライナ政府省庁が被害者支援をしていないことを認めたことである。

このあたりから当局のアンナの扱いが変わり始めた。今年初めに非営利法律事務所からアンナの代理人となったイリキエワ弁護士は、「やっと当局は気を入れて性的暴力事件に向かうようになった。とにかくそれを扱うようになった」と言った。

昨年夏、二人の SBU (ウクライナ保安庁) がやってきて、アンナに性的暴行被害者として認めることを記した文書を渡した。それから数か月間、当局はアンナにロシア兵との接触に関する質問を多く行い、11月になって彼女が前々から要求していた嘘発見テストにかけた。

テストは二時間続いた。SBU の役人達がいろいろな質問をした。強姦されたのか？何人に強姦された？略奪をやったのか？ロシア諜報機関に協力したのか？人を殺したことがあるか？等々。ロシア兵の戦争犯罪調査と同時に私の身辺調査みたいだった、とアンナは私に語った。役人から嘘をついたら刑務所行きだと脅されたので、彼女はすべての質問に正直に答えた。それから数日後、合格だという連絡がきた。

役人の質問は、彼らがアンナをロシアの協力者と疑っていることが丸見えであった。『インターセプト』誌は SBU に嘘発見テストについて質問したが答えなかった。当局のアンナの扱いは明らかに正式の取り調べであったが、アンナは正式取り調べを通告されなかったと、弁護士が言った。現在に至るまで正式の起訴がないにもかかわらず、ブチャの地域世論は彼女の有罪を確信していた。

私がインタビューした検事総長事務所の戦争関連性暴力を担当するイリーナ・ディデン

³ 米国はウクライナ支援のうちのローンを戦争が終わったら請求するが、ローンは2兆ドルを超えていて、ウクライナに払える力はない。戦後ロシアを刑事裁判に訴えて賠償金をとり、それで払わせるという計画を立て、ウクライナにロシアの戦争犯罪を収集・記録することを激励している。その計画は『ニューヨーク・タイムズ』と『ワシントン・ポスト』が報道した。中にはバフムート虐殺のようなフェイクもあるようだ。

コ (Iryna Didenko) は、戦争開始後数か月は「大きな間違い」があった、法執行機関は被害者をきちんと扱う準備が整ってなかった、と認めた。捜査官達は捜査内容を機密扱いにしないで、それを地域社会に流すこともあった、と言った。自分が任務に就き、性的暴力事件を他の機関から引き継いだとき、それまでの取り調べの全部を見直した。現在では、すべてのチームに必ず一人は女性を配置しているし、被害者や証人には思いやりの気持ちを込めて接するように教育している、と彼女は刷新について説明した。去年解放されたヘルソントとハリコフでは試験的プログラムを打ち出した。複数の省庁の人間から捜査チームを構成し、戦時下の性的暴力を扱う最良の方法について国際社会の専門家からの指導訓練を受けさせた。

法執行機関の変革には時間がかかる、とディデンコは言った。それに性的暴力に関しては一般国民の教育を強化することも必要だ、と言った。彼女は米国国際開発庁主導の5月に発表された世論調査を引証した。回答者のほとんどが性的暴力の被害者は「ウクライナ社会では偏見の目で見られる」ので、助けを求めるような報告はしていない、と答えている。「ときには強姦被害者が強姦に抵抗しなかったと人々が言うこともある。しかし、そういう姿勢はいつか変化するでしょう。被害者を支援する動きが強まっています」と彼女が語った。

ディデンコはアンナのことを詳しく語ることにについては、守秘義務を理由に断ったが、アンナによれば、ディデンコは今年初めにアンナを訪れて、捜査官たちの彼女への扱いを聞いてびっくりした。それから一週後、9カ月にわたってアンナが返せと警察に要求していた押収された携帯電話が戻された。

昨年未までにディデンコ事務所は220件以上の性的暴行捜査を行った。そのうち62件に関してロシア兵を告訴した。彼女は、被害者に対する偏見やまたロシア兵が帰ってくる



という恐怖のために、報告しない被害者がたくさんいると思っている。この夏の初めにアンドリー・コスティン (Andriy Kostin) 検事総長は戦時下の性的暴力犠牲者の保護を強化する新計画を導入した。彼は、ロシアは性的暴力を、抵抗者を辱める拷問として使う、と書いたことがある人物である。

2022年4月2日、ロシア軍が撤退した後、ウクライナのブチャのヤブルンスカ通りに横たわる市民の遺体。Photo: Ronaldo Schemidt/AFP via Getty Images

分裂する社会

ロシア協力者に罰を与える法律を作れという最初の要求は、2014年のドンバス紛争⁴の後に出現した。ドンバス紛争では、ウクライナからの独立分離派が、ロシアの後方支援を得てウクライナ東部を獲得し、現在のウクライナ戦争へつながるきっかけを作った。ウクライナ戦争開始後にロシアは分離派が獲得した東部地域の一部を併合した。

ドンバス州のドネツク地方出身で、有名ブロガーから兵士になったヴィタリー・オフチャレンコ (Vitaliy Ovcharenko) が、分離派を支援する役人や行政官に公職に就けなくするなどの民事罰を科する法案を2017年に起草した。私は彼にインタビューした。彼は、ウクライナ側の支配地域でも、親ロシア派の住民が隣人に危害を加えているのに、その人達が自由に街の中を闊歩していることに憤慨した。彼らから危害を受けた人々が店の買い物のときに、危害を加えたロシア協力者に出くわすことも日常的であると、彼は言った⁵。彼は、「ウクライナの東部の町では正義の危機があったのに、誰もそれを正そうとはしなかった。危機をもたらす連中を裁く人間もいなかった」と彼は語った。

2018年、オフチャレンコの法案が議会に持ち込まれたが、何の進展もなかった。オフチャレンコをはじめとする地元の活動家たちは、政治家には敵国協力者を犯罪者とする意志がないのだ、と憤慨した。それどころか、東部から500マイル離れた首都キーウの人権派弁護士たちが彼を復讐心に燃えた退役軍人のように扱い、彼の法案は暴力的「自警団」を発生させるものと批判した。「人権派の連中は『こんな法案は社会を分裂させる』と言ったので、私は『キーウを出て東部へ来い。すでに分裂が存在している』と言ってやった」と彼は私に言った。「政府の厳しい規制がないと社会が感じれば、民衆による大衆的規制が発生する。それは、自動車の破壊、家の打ち壊し、火炎瓶、暴力などが荒れ狂う大騒乱を招くことになる」と、彼は威嚇的に語った。

後になって、ゼレンスキーの政党「国民の僕」を含めた幾つかの政党が同じような内容の法案を提出したが、賛否投票に付されなかった。議員たちがウクライナ社会の分裂を招くと心配したことと、わざわざ敵国協力者所処罰法を作らなくても、反逆罪など既存の法律で十分間に合うと思ったからである。

昨年までに、ロシア侵攻という事態の中で議員たちはゼレンスキーの法案を急いで法制化した。大統領法律顧問団は成立した法を評価したけれど、彼らは時間的にせかされ、「異

⁴ 2014年は米CIAの主導のクーデター（マイダン革命と呼ばれるカラー革命）では選挙で選ばれた政権を崩壊させた後、内戦状態となった。内戦は、ウクライナ、ロシア、ドイツ、フランスの首脳によるミンスク合意により、ウクライナ政府がロシア語話者が多い東部の自治を尊重するという条件で、解決した。しかし、右翼武装勢力とウクライナ政府はミンスク合意を破り、東部のロシア語話者が多い地域に攻撃を続け、それに抵抗して自治共和国を結成した。なお、ウクライナ戦争は2014年に米国が仕掛けたクーデターを始点とする代理戦争と言える。

⁵ それとは逆に、コンビニの買い物では、ロシア語で会話したために客と店員がウクライナ国家警察に連行される弾圧もある。

常な状態の中」で法案を作成したと言った。その結果生まれた法は「悪法」であると、多くの批評家が非難した。法の文言も非常に曖昧で、本来対象としていたよりはるかに広い言動を敵国協力犯罪とするようになった。国内のある地方の人に当て嵌めると、数万人の人が犯罪者になってしまう可能性がある。

その法律は、占領当局下での政治的活動、法的活動、警察活動への参加を禁止し、国民の死や重大な結果を招く行動」として占領者への資源移転を禁止している。教育機関でロシアのプロパガンダを流すこと、や「ウクライナ国民がウクライナへの武力侵略を公けに否定する言動」を禁止している。それに対する処罰は公務員になることの禁止から財産没収や15年間の服役まで多岐にわたる。

この法律の提起者は抑止力になると言うが、それは戦争の複雑さやその中でも国民の生きる必要に関してはまったく言及しない。それは、ただロシア軍に軍事的または民間の攻撃目標に関する情報を提供するウクライナ国民だけに適用される。この夏にロシア軍が混雑しカフェをミサイル攻撃して13人を殺害するのを手引きしたスパイがいたという事件のようなものを想定しているのだろうが、それだけでなく、占領下でも自分の仕事を続ける地方公務員や教壇に立つ教員やロシア軍に商品を売る民間商人、あるいはロシア軍侵攻を支持すると思われるような意見を言ったり書いたりネットに流す個人にも適用され、敵国協力者とするのだ。

ウクライナ政府の記録によると、この法律を使って検察が「協力者」かもしれないとして捜査した件数は6000件以上である。多くは欠席裁判され、すでに数十人が有罪と判定された。

市民団体や一部の役人はこの法律を修正するかもっと慎重に選択して使うことを政府に要望した。解放した占領地の再統合の担当大臣であったイリーナ・ヴェレシチュク

(Iryna Vereshchuk) は、ロシア軍に占領された地から逃げ出さなかった者に協力者という烙印を押すことに反対した。「いつ何時自分も協力者の烙印を押されるかもしれないと思って不安に暮らしている人々が多い」と彼女は昨年言った。ロシアに占領されたクリミアのウクライナ政府常駐代表のタミラ・タシェヴァ (Tamila Tasheva) も占領地に長く住んでいる人々を協力者と見ないことを要望した。

しかし、これまでのところ議員が態度を変える気配はまったくない。裏切り者と見られている者たちに優しくすると住民から自分も裏切り者と思われるのを恐れているのだ。

人権グループ ZMINA のルノヴァ (Lunova) は「政府は現実には起きていることをかなり握んでいると思う。この問題に取り組んでいる法執行官は物事を秘密にしない。しかし、問題は、法律を変えらるとなる何故変えるのか社会に説明する必要があることです。この協力者問題は社会を分裂させる厄介な問題を孕んでいるのです」と言った。

こういう問題は必ずしもウクライナ特有の現象ではない。「戦争があると必ず敵側への協力者の問題があり、協力者には残酷な仕打ちが加えられる」と、ゴールウェイ大学のアイルランド人権センターの副所長シェーン・ダーシー (Shane Darcy) 教授が言ってい

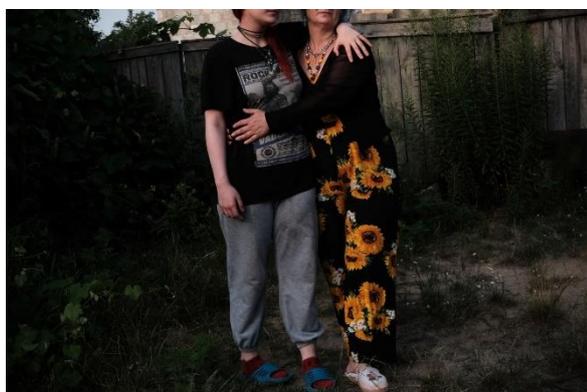
る。彼はこの問題を地球規模で研究している。しかし、この問題を適正に扱うモデルはない。国際人道法 — 紛争地域の行動を規定する法体系 — にも、協力者問題となると「盲点」がある、とダーシーは付言した。

国際法は占領下でも人々が出来るだけ通常の生活を送ることができるように占領者が行政サービスを行うことを義務付けている。行政サービスは元の公務員に、強制でないかぎり、運営させることを推奨している。「もちろん、占領下においては強制と強制でないものの区別は困難である」とダーシーは言う。国際法はまた国家が敵国協力者を罰することを、人道に反しないという条件で、認めている。「ウクライナは、ウクライナの名誉のために言うが、すべて法律に従って処理している。協力者を報復のために電柱に吊るしたりしない」とダーシー。

ウクライナの司法システムは、ロシア軍が行ったとする8万件もの戦争犯罪への対処に苦慮している。協力者法を批判する人は、すでに過度の仕事を抱えている司法制度にいつそう負担をかけるだけで、実際には機能できなくするだけだと指摘する。「私たちは事情を理解しますが、それなら実際に重大で、国家安全に関わり、本当に深刻な結果をもたらすような敵国への協力行為だけに限定して、法執行すべきです」とルノヴァは言う。「ゼレンスキーや NATO を非難するフェイスブックの投稿に「いいね」をポストした人を裏切り者として起訴するのをやめるべきだ。」

「彼らは人々を互いに敵対させている」

人権派弁護士でウクライナ法律諮問グループの理事長のナディア・ボルコヴァ (Nadia Volkova) は2014年事件の後実行されなかった暫定的司法改革計画の作成に関わった一人だが、彼女は低レベルの協力者を大量に告訴するやり方は将来に大きな禍根を残すと言った。すでに、昨年のロシア侵攻で、前々からウクライナを引き裂いていた亀裂が深まった。「ある意味ではウクライナは統一国家であったことは一度もなかった。ゼレンスキー



らこの法律の作成者は、この亀裂を神経質に→操作することにより、それを余計に大きくしている」と、彼女は言う。「国民をお互いに対立させているのです。ウクライナに忠誠を誓って政府のやり方を支持しないから、今のような状況を招くのだ、責任を取れ、と言いたいのかもしれません。しかし本当に国家統一を望むなら、この法律はあまり適切な方法ではありません。」

2023年7月6日、ウクライナのブチャの自宅の裏庭に立つマリアと母親のアンナ。彼らは近隣住民から裏切り者とみなされ、疎まれている。Photo: Ira Lulu for The Intercept

隣人と裏切り者

ウクライナ軍が占領地を取り返そうとする中で協力者バッシングが疫病のように国中に蔓延した。昔からある対立が戦争の中で新たな形で増殖、再生された。被害者が被害者を責めるのだ。

「時には、本当の利敵行為の裁判もあります。ちゃんとした記録や証拠が整った裁判です」と、ブチャ市を管轄区域に含むイルピン市裁判所の首席裁判官のレオニード・メルズリー (Leonid Merzlyi) が言った。「でも、多くは隣人同士の争いです。」

普通、協力者事件は国家警察が調査し、高等裁判所で裁かれるのだが、地方裁判官のメルズリーは、協力者裁判が孕む複雑な意味を知っていた。「占領から逃げ出さない人がいたら、何故だと問います。ロシア兵が家を訪れたら、何故だと問います。一つ一つ調べる必要があるのです。ウクライナ社会にとって非常に重要だからです」と彼は語った⁶。

「以前にロシアを支持したことがある人の場合は、これは明白な協力者になりますが、中には子どもを守るためとか、その他やむを得ない状況下で協力的行為をする場合もあり、その場合は判定が困難です」と言った。

24年間ブチャの市長をしてきたアナトリー・フェドルク (Anatoliy Fedoruk) は、ブチャより長く占領された地域と比べるとブチャには協力者容疑件数が少ないが、積年の住民間の対立感情は戦争とともに悪化したと認めた。「同じ通りに住んでいる者同士、いや同じ家族内で、いがみあうことがよくあります」と彼は言った。「ウクライナは文明社会です。憶測だけで人を判断して決めつけるべきではありません。協力者かそれとも強姦被害者かの判断は、噂ではなく、証拠によって判断すべきです。」

私が市長をインタビューしたとき、フェドルクはアンナの事件はよく知らないので、現在続行中の捜査に関してコメントできないと言った。数か月前から空襲で壊れた屋根を直してくれと市に要求していたが返答がないまま、翌日、市職員が屋根を調べにやってきた。(しかし、まだ屋根の修繕は行われていないと聞いている。)

アンナとマリアに関する戦争犯罪容疑の件は公判前手続き段階にある、とイリキエワ弁護士は私に言った。検事総長の調査の一環として、アンナとマリアは何回も首都キーウへ行き、ウクライナ当局がロシアのソーシャルメディアから収集した数百枚の写真から、家に来た兵士を見つける作業をやらされた。あるとき、二人の作業をじっと懐疑の目で見守る調査官がいた。警官がマリアを殴って手錠をかけた家宅捜査の指揮をとっていたペレハティ (Pelehatiy) であった。ペレハティはアンナがロシア兵から性的暴行を受けたと訴えているらしいが、彼女は捜査官の私にそのことを言わなかった、と『インターセプト』誌に語った。「彼はアンナを信じていないのです」とイリキエワ弁護士が言った。

⁶ 戦時下の国家は国民総動員の必要から国民全体の懐柔政策を採るのが予想されるが、ゼレンスキーは、この国民を分断する協力者法だけでなく、労働者弾圧の法律を作り、野党を活動停止にし、民営化と多国籍企業への国家資産の売り渡しなどのネオリベラル政策を押し進めている。

アンナを信じていないのは彼だけではなかった。イラを含む隣人たちもそうで、隣人たちはアンナを嘘つきで、被害者のふりをしているだけだと、捜査官たちに話した。イラは「みんなそう思っているけど、証拠がないのでどうにもできないのです」と私に言った。

アンナにとって、略奪か協力者の罪のどちらかで刑事告訴されようが、もうどうでもよかった。どちらにしても、彼女はブチャで「除け者」なのだ。

去年の冬、誰かが彼女の家に乱暴を働き、フェンスを破壊した。クリスマスイブで、アンナとマリアが外出している間に、二人の若者が野球のバットで家の窓ガラスを割り、テレビを盗み、年老いた母を殴打したのである。アンナが警察に通報したら、二人の若者の一人が壊した壁を修繕し代わりにテレビを持ってきた。彼は、自分はお母さんを殴っていないとアンナに言った。ところがその男が、1月に帰宅中のマリアを襲い、ナイフで脅した。再びアンナは警察に通報した。しかし、今度は警察は全然動かなかった。

アンナは、自分を蹂躪したロシア兵だけでなく、隣人とウクライナ当局を恨むようになった。「最悪なのはオークたちではなかった」と彼女が言った。